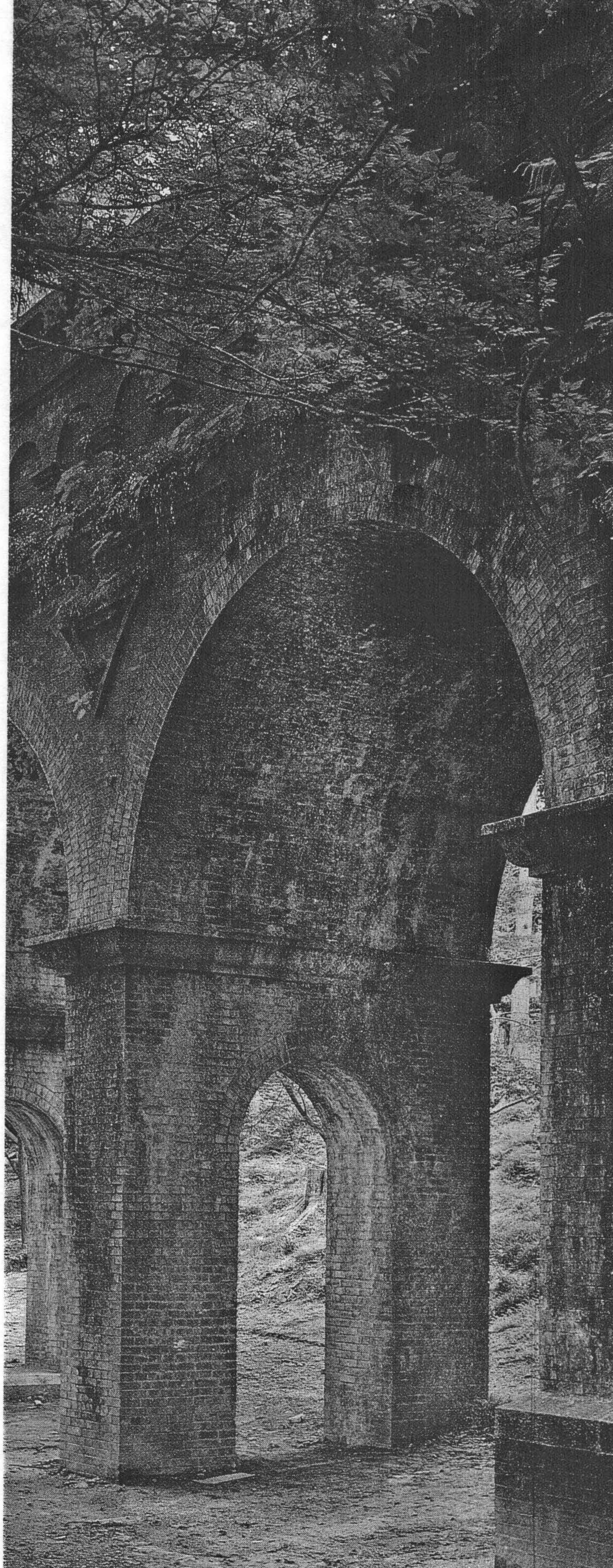


# 近代京都のあゆみ

後藤 靖・藤谷俊雄 監修



かものがわ選書4

## 43 京都空襲

崩れた「非戦災都市」論

藤谷 俊雄

人を欺く「大東

亜戦争」美化論

日本帝国主義と天皇の軍隊は、「満州事変」にはじまり太平洋戦争に終わる十五年間にわたる戦争でなによりもまず中国をはじめとするアジア諸民族にはかり知れない被害を与えた。日本の中国侵略による犠牲となった中国人民は一千万人にたつするといわれている。そのほかにベトナム・インドネシア・フィリピン・インドの四カ国で、餓死・苦役・弾圧などで八百六十万人をこえる人民が殺され、朝鮮人民で日本のため戦場にかりたてられて死傷したものは十五万人以上、また日本へ強制連行されたもの百数十万人、そのうち日本政府発表による死亡・行方不明だけで六万四千人といわれている。「日本の「大東亜戦争」がアジア諸民族を欧米諸国の国の支配から独立させた」、などという戦争美化論はまったく人をあざむく議論であって、第二次大戦以後のアジア諸民族の独立は、日本と欧米帝国主義との矛盾対立の中で、自力で起ち上ったアジア諸民族の闘争の結果であることはいうまでもない。日本帝国主義が侵略戦争の目的として「東洋平和」とか「アジアの解放」とかを掲げていたとしても、彼等の占領地支配がけっして諸民族の独立自治を認めただけでなく、まったく植

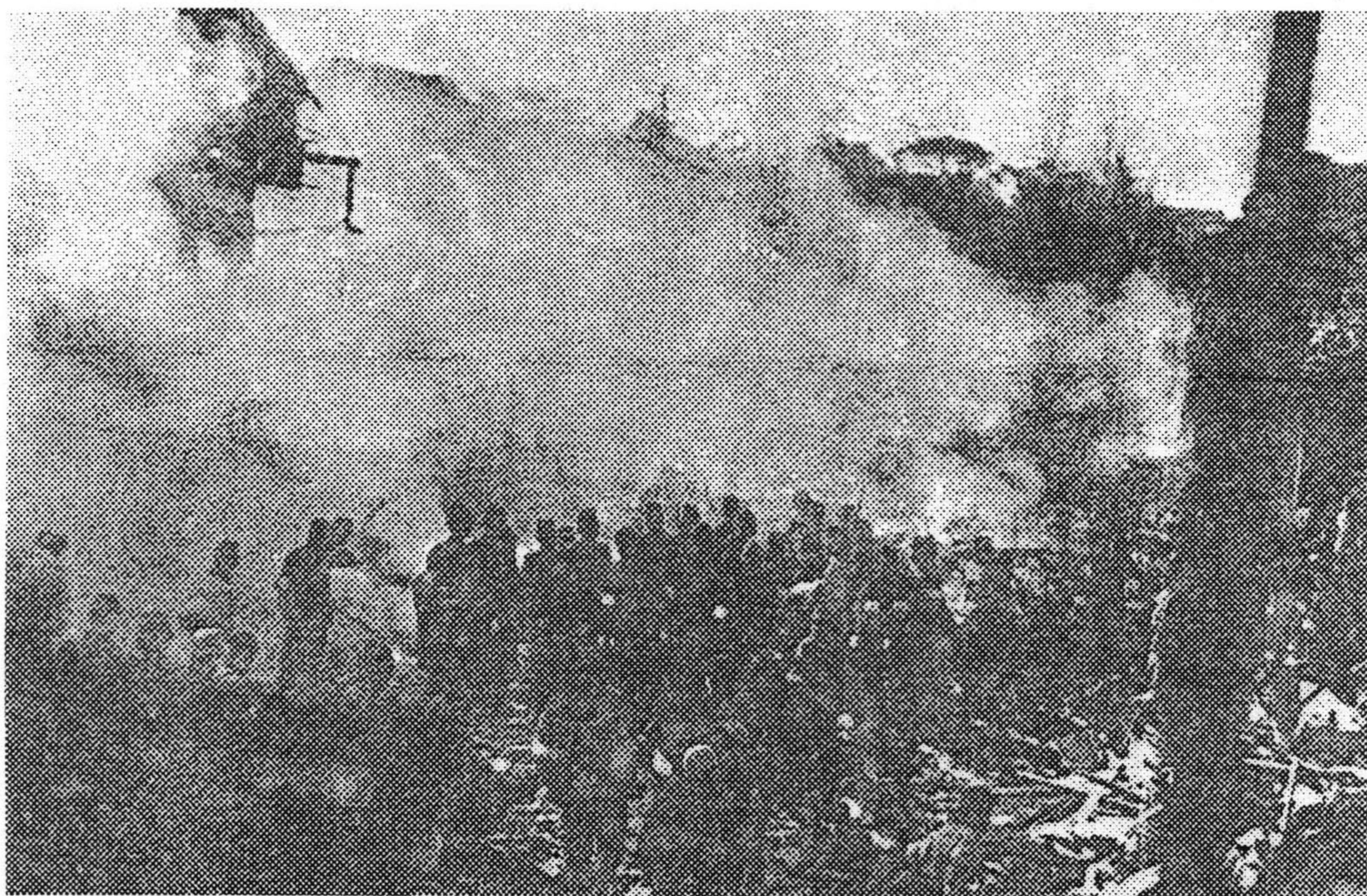
民地的な支配であった事実を見れば、そのことは明らかである。

このように日本帝国主義の侵略戦争は、一方においてアジア諸民族に多大の被害を与えたと同時に、日本の人民にも多くの犠牲を強いた。軍隊に召集されたもの七百二十万人、そのうち百五十五万人が死亡、負傷・行方不明は三十万人、敗戦後の抑留での死者など三十万人、そのほか国内の空襲、原爆による犠牲者、および沖縄や「満州」で死んだ非戦闘員は百万人にたつするといわれる。そして空襲と疎開によって焼失、あるいは破壊された家屋は三百五十万戸にのぼり、三百五十万人の学生・生徒が勤労働員にかりだされ、三百万人の若い女性が工場で働かされた（以上の数字は、新日本新書『日本の歴史』下による）。これらの数字は冷たいけれども、その一つひとつに人びとの血と汗と涙がしたたつているのである。戦争はどちら側においても被害をこおむるものは人民大衆であることがよく判る。

### 知らされぬ空

### 襲被害の実際

ところでわれわれの京都府市民がこおむった被害はどうであつたらうか。当時の全国二百六都市のうち百都市と十三カ町が、アメリカ軍の空襲の被害をうけ、死者五十万九千八百人、罹災者九百九十五万一千百人（全国戦災都市連盟調査）にのぼるなかで、京都府は空襲の被害が比較的少なかった府県の一つであり、とくに京都市は大都市のなかで戦災をこおむらなかつた唯一の都市であるとされてきたが、一九七二年、京都宗教者平和協議会がはじめて京都空襲の事実を発表し、ついで七四年そのあとをうけた京都空襲を記録する会が京都府立総合資料館と協力して、京都空襲の体験と記録『かくされていた空襲』を刊行して以来、「非戦災都市」の「神話」は破れた。このときの調査によれば、空襲をうけた地域は三十九カ所におよび、死者三百二人、負傷者五百六十一人、被害家屋七百五十六戸、罹災者一千五百七十九人にのぼっている。これは調査当時判明したものであつて、



1945年1月26日夜、東山区馬町に爆弾が投下され、死傷者89人、全半壊家屋44軒をだした

この本が出版されてからは少なからぬ新しい空襲の事実が通報されている。北桑田郡の美山町でも空襲があり家屋が焼失して、負傷者が出たことが判った。

なかでも八十九人の死傷者をだした、一九四五（昭和二十）年一月十六日夜半の京都最初の東山区（渋谷通の空襲は、わたくし個人にとっても忘れられない思い出がある。当時町内会長や防空班長をやらされていたわたくしは、爆弾投下の音に仮眠をやぶられ、すぐに自宅の屋根に上って見ると東山の麓に火災の起こっているのが望見された。当時は全国的にもまだ大空襲が始まっていないうときで、いよいよ戦争が国内に迫ってきたことを感じて、身のひきしまる思いがした。

翌朝現場に出かけてみると、渋谷通は三島神社付近までしか行くことができず、警官や警防団が現場に近づくことをゆるさず、空襲の規模や被害の状態などはほとんど知ることができなかつた。新聞は軍

の統制下にあり、京都の空襲があつたということだけをのべ、**「被害は軽微で住民は戦意いよいよ高めていく」**といった記事をのせているだけであつた。その後も戦時中の空襲被害については、国民はまったく知ることができず、直接の体験者の話を聞く以外は、口から口へと伝えられる噂として知るしかなかつた。それもうっかり警官や憲兵の耳に入れば、**「流言飛語」**とか**「軍事機密」**とかいう名目で捕えられるおそれがあつた。

### 補償もない非戦

### 闘員の死傷者

このようにして六月二十六日の死傷者百十六人におよんだ上京区西陣の空襲、そして七月二十九日、三十日にわたる舞鶴大空襲——これは死者百八十人、負傷者四百人——にのぼつた——などの京都の大空襲をはじめ、その他の空襲はまったく闇から闇へと葬りさらされたのである。そして戦後は他の戦災都市にくらべて京都は外見上被害が著しく見えなかつたことと、アメリカ軍の占領下で意図的に流されたと考えられる。京都は文化都市であるから空襲が避けられたのだという**「神話」**のもとで、**「非戦災都市」**という観念がいつのまにか一般化したというわけである。

(注) 吉田守男氏の研究によると、原爆投下目標とされた都市には、米軍参謀本部から爆撃禁止命令が出され、京都も原爆投下目標とされていた期間(五月十二日～六月十四日)には空襲がなかつた。その後七月二日、航空部隊参謀部は「京都を原爆攻撃目標として温存」の意見書を提出、再び京都への爆撃禁止命令が出され、終戦まで解除されなかつた。なお京都は七月二十二日、スチムソン陸軍長官の反対により原爆投下目標から最終的に除外されたが、スチムソンの日記にはその理由として、「日本人を我々と和解させることが長期間不可能となり、むしろロシア人に接近させることになるだろう」と、文化都市京都を守ることもよりも、戦後政治におけるアメリカのヘゲモニーの確立が優先していた。

そのかげで現実に身体に負傷し、肉親を失い、財産を亡くした人びとがどのような苦しみと悲しみを味わってきたことか。当時、洛北実務女学校生として舞鶴海軍工廠に動員されていて被爆し、両眼失明のまま

進歩と革新のまち、京都――。

そこには営々として積みあげられた歴史と伝統がある。

明治維新から敗戦まで、近代京都をつくった民衆の歴史を

体験者と研究者三十四人が熱い思いをこめて書きあげた。

たんねんな史料調査にもとづく緻密な分析、

実体験をもとにした生なましい証言。

圧制に抗して、自由と平和、民主主義と進歩をめざした

京都の民衆の営為が深く刻みこまれ、新事実が発掘されている。

そして、それは今日の京都人にうけつがれ、

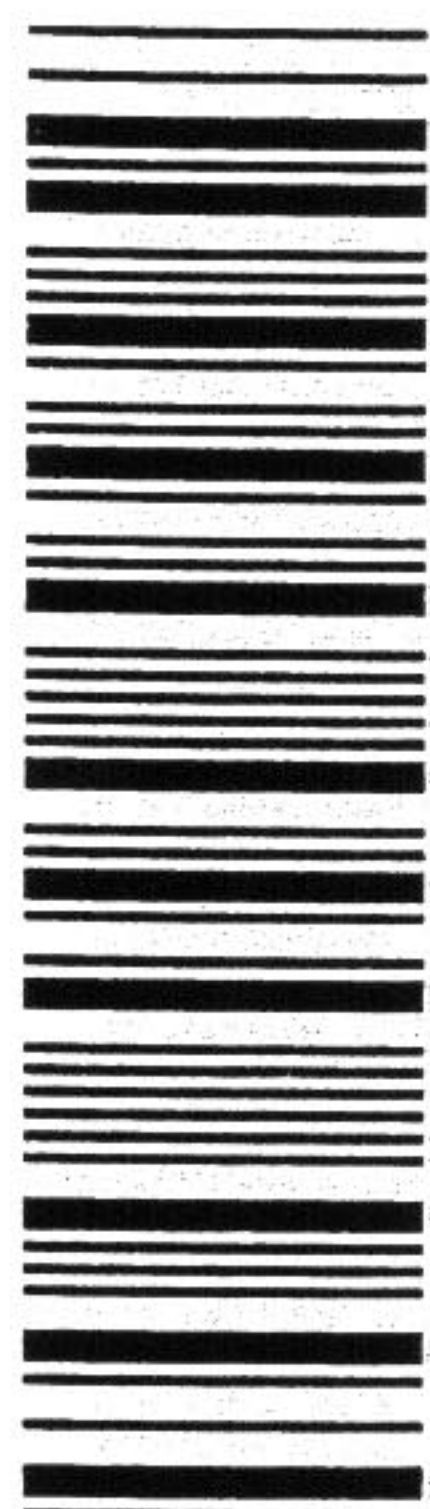
発展させられていることが手にとるようにわかる。



# 近代京都のあゆみ

後藤 藤谷 俊雄 靖  
監修

京都市右京中央図書館



330780220

M748AE1

21022013

夢ふくらむ

図書館に

216,2

\*

定価 2,000円 ISBN4-900247-00-8 C1021 ¥2000E